



第5号

さらしな の 里

「友の会」だより



2001・秋



しめ縄をなう西沢今朝一さん

仕事つきりじゃだめだ

毎年、縄文まつりで、縄文の衣装に合わせ、しめ縄風の冠作りを担当している西沢今朝一さん。手慣れた手つきでスルスル縄をなう。ひとりでの縄ができていくようだ。まさに職人芸。ことし八十七歳。「友の会」の最高齢者。縄ないは、五歳のときからやっていたという。

当時は養蚕が盛んで、桑を運びやすくするけるために縄が多量に必要だった。このとき使うのが、ワラを二、三本ずつなつて箸一本ぐらいのふとさにした細縄。これを一尋(両手を左右に広げた長さ)に整えたものを十本ひとまとめに束ね、その束をさらに三つまとめて一把にする。

父親が病弱であったため、弟の子守りをしながら、この一把を作るのが日課だった。養蚕が終わって冬の間は、朝から晩まで、ずっとこの作業に追われたとのこと。

今は、ぶどう作りに励む。「ぶどうの木になつたつもりで作らなければよくない。花を見れば、その年の善し悪しがわかる」。でも、「人間、仕事つきりじゃダメだ」とも。「友の会」の活動や縄文まつりへの参加も楽しいそうである。(写真と文・翠川泰弘)

羽尾の民話が冊子に

羽尾地区に伝わる民話22編を収録した冊子「さらしなの里 羽尾の民話」ができあがりしました。塚田哲男さんが聞き知っていた民話を書き出し、それを野本洋子さんらが新たに構成しました。の中には春先に資料館で行われた民話朗読劇の出し物の一つ「羽尾斜子の起こり」も盛り込まれています。製本もした野本さんに紹介していただきます。

振り返ってみると、明けても暮れても民話一色だったようなこの

一年。

哲男さんに教えていただいたお話の数々に触れ、さらしなの里の昔々を訪ねているうちに、まるで自分が売れっ子俳優のような気分にもなった。

まずは、弘法大師さまの役をこなし、明日からはせつこいばやんの役。翌月は冠着山へぼこだき岩の高さを測りにいく和尚さん。その次は道ろく神で、ずうつとあとには、

なんと宗良親王の役が待っている。

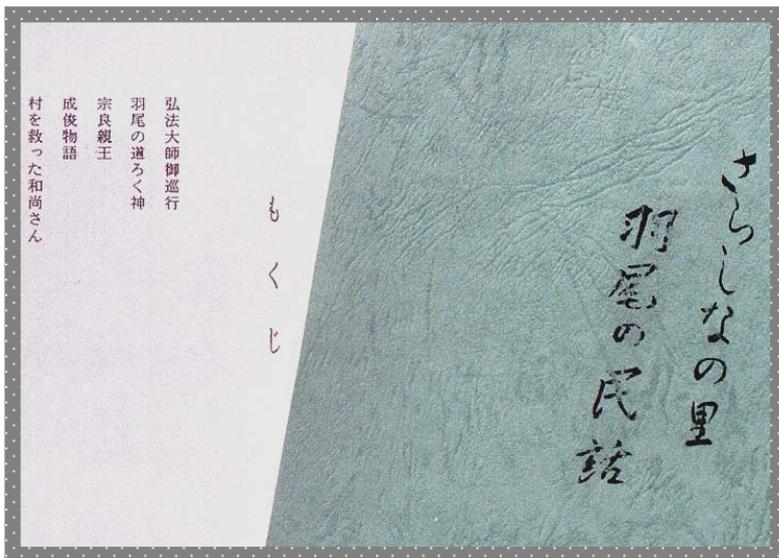
好奇心だけは旺盛だが、知識も想像力

もないポツと出の役者に一体何ができるだろうか。

ろうか。

一歩も前に進めない日が続き、あせるばかり。

江さん、中村登喜子さん」と、太っ腹のス



そんなある日、原作者で名監督(哲男さん)、実力派の共演者(荒井君

「羽尾斜子の起こり」も収録

ポンサー(夫)が手を差し伸べてくれ、どうにか演じ切ることができた。こうして「さらしなの里・羽尾の民話」はできあがった。読んだり聞いたりしてくださった方の反応は実にさまざま。

方言がおもしろい。懐かしい。むずかしい。ほかにこんな話を聞いたことがある。私も作ってみたい。羽尾が歴史のある由緒ある土地だつてよく分かった。いい所に住んでうらやましい。孫が目洗い石の説明をしてくれた。うちのぼあちゃん、クスクス笑いながら読んでるよ。

戸倉小六年生のみなさんからは、もつと戸倉町の歴史や伝説を知りたい。図書館でさがしてみよう。社会科が苦手だったけど、興味がわいてきた。昔の人の知恵つてすごいな。こんな感想文が届き、ちよつとうるうるしてしまつた。

ほんの小さなきっかけが出发点となり、多くの人を巻き込んで、楽しく苦しく、そして充実した一年を過ごせたことに感謝あるのみ。

クルミに沢蟹 ジンケン

さらしなの里に、太古より自然の恵みを提供してくれている沢に雄沢川がある。この川の周辺には、縄文時代からの遺跡が数多く点在する。

冠着山を水源とし、あるときは大濠水で流域を荒らし、大干ばつに見舞われたときは、その命綱としての役割を果たし、われわれの生活、文化の物語に、また、思い出に深くかかわっている。そんな流れの中で私が幼少のころより、裏の沢(雄沢川)にまつわる過ぎ去りし思いの一部を語りたいと思います。

「松やー。朝飯前に裏の沢にいつてクルミ拾ってきてくれやー。ものき(物置小屋)にザルあるからならー」
ばやんの声である。

当時はまだ、護岸工事ができあがっておらず、自然な岸になっており、クルミの木や、クリの木が各所に生えていた。時期になると、毎年のように、落ちた実が流されて、沢石や

流木のところにつつかかかっており、けっこう

拾えたものだ。

鬼グルミ、姫グルミ、榎グルミ。よく、よごしのときに、うどんのタレに、すり鉢ですつては食べていた。



現在の雄沢川。クルミの木の下で実を拾う小学生

焼くと、割れるときにシューウと吹き、灰を散らかしたものである。

焼いて食べたものには、沢蟹さわがにもある。カンカラの大きなものを持って沢に入り、小石をめくると、たくさんいたものだ。これがかまどの火の中に入れて、残酷ながら焼いて、灰を口で吹き飛ばして食べた。

秋になると必ずといってもいいほど大水が出た。一部堰堤もあったが、大水が出るのと上流より大きな石が流されてきて、そこに大きなドブラができる。千曲川に近いせいか、水が多く出るたびにジンケン、ハヤなどが遡上して、その深場に住みつく。夏場の水の少ないときに、川止めをし、バケツで水をけい出して手づかみで魚をよく捕らえ、年寄りに誉められたものだ。鰻カシカもいた。夏になると、水遊びの格好の場である。男児、女兒、みなフルチンで楽しんだ。

今は見かけない。鶺鴒セキレイがよく、つがい
で飛び回っていた。なにか、こんなこと
書いていると、童心を思い出す。のだ
かな日々だったように思う。

蛍舞う 清き流れの 雄沢かな

(竹森松雄)

フルチンで遊んだ雄沢川

生で食べるとクサツパチができるから焼いて食べろ、と言われた。かまどでできたオキで

おぼろの冠着

⑤

中世の冠着山は、修験道の道場として珍重された。

この辺りの修験道は、戸隠山を二本尊とするが、冠着

ミニ戸隠山に集まった修行者

山は戸隠山とくらべて里に近く、容易に入山できるので、「ミニ戸隠山」として修行者の集まる所となった。山に入ると、修行にまつわる地名が残されている。

黒滝、不動滝は水ごりの

場であつて、石の像が安置されている。

甲見堂は、坂井村との境にあるが、小御堂とも書かれ、小さなお堂があつたとされる。そこと、冠着峯とのくぼみ、小さな



峠を、行者峠という。峯入りという行者の修行の姿を残している地名だ。

樽の口の泉のそばに九頭竜がある。この神さまは水の神さまで、ご本家は戸隠の九頭竜権現である。

そのすぐ下の峠が観音峠。いまは嶺を掘り割つて少し平坦になつたが、前は仙石から黒滝の上へ出る険しい峠であつた。

坊城平は、その昔、坊（お寺のもと）があつた所といわれる。あるいはお城もあつたかもしれない。

初冬の坊城平
この平の上に、十三仏という所がある。十三仏とは、死語、追善の供養をするときに、回忌ごとに配置された十三人の仏さんのこと。

この場所は、児抱岩の直下で、この岩の片割れが落下して、林の中に大きな岩があちらこちらにある。これらの岩を十三の仏さんになぞらえて、この名がつけられたものだろう。

（塚田哲男）

〈編集後記〉 私は竹森さんとは年齢にして二回り近く下ですが、沢を下る魚を捕まえた記憶は鮮明です。

実家は、仙石から下つてきた沢がちようど若宮から来た用水に流れ込む所であり、大雨が降つたときは、沢の終点に網を張つておくだけで、すぐフナで一杯になりました。すくい上げるときの重たさの感触は忘れられません。残念なのは、双方の護岸が、互いに段差を作る形で整備されてしまったことです。魚はもう遡上できません。コンクリートになつたから、人も車もゆつたり通れる道ができたのですが…

子供たちが外で遊ばないのは電子ゲームのせいだけではないような気がします。今号のトップは趣向を変えました。西沢さんの手さばき、指のしなやかさ、それを写真に収めた翠川さんもお見事。 （大谷善邦）

さらしなの里友の会事務局

T389-0812

長野県埴科郡戸倉町羽尾二四七の一

さらしなの里歴史資料館内

電話026(276)7511

FAX026(261)4161